

【発達障がいは発達する～強迫性の減弱～】

自閉スペクトラム障がいの行動特徴は「こだわり」と言われるような同一性保持の傾向、また、その行動の反復強迫性にあるのは、誰もが知るところであるのだが、ここではその背景、さらにその減弱について検討していこうと思う。

人は、自閉スペクトラム障がいであるかないかにかかわらず、不安や緊張を軽減させる手段として「同一性保持」的な行動をとるものだという事は、簡単な自己分析をすることで理解することができる。

不安や緊張が高まった時、自分が繰り返し経験したことのある行動をとりやすいことは、「先の見通しが立ちやすく」、したがって「失敗のリスクが小さくなる」からなのだが、例えば、初めて降り立った知らない国の知らない街で、食事をとろうと思ったとき、そこにマクドナルドの看板があれば真っ先に飛び込んでしまう行動が、これに当たる。

自閉症の脳みそが、初めから同一性保持的な傾向を持っているのか、後天的に不安や緊張が高い状況を回避するために強化された適応行動なのかは、ここでは判断できないが、臨床的にはもともと自閉症脳みそが持っていた傾向が、その後の不適切な環境との軋轢の中で、そのストレスから逃れるために、さらに同一性保持への強迫反復性が強化されたと考えると良いと思う。

とすれば、発達障がいは、適切な環境のもとで発達するわけだから、この「こだわり」という形や、その反復強迫性は適切な環境のもとで減じるはずである。

A男さん、いわゆる強度行動障がい状態を呈する。他害や物損がある。養護学校高等部を卒業後すぐにB入所施設を利用。感覚障がい、特に聴覚過敏に配慮した居室、食堂、浴場等の環境を提供するとともに、スケジュール等の視覚支援を提供し意思決定支援を進めた。次第に課題行動が減じ始めたその頃…。いつも彼に預ければ完璧に無くならないはずの調理実習室の鍵がいつもの場所に無いのである。彼は、部屋の鍵を開けたとき、その後、必ずその鍵を部屋に入ったすぐの

右側にあるホルダーに掛けてきた。2年以上も完璧にそうしてきたのに、そこに鍵が掛けてないのである。結局その鍵は大騒ぎの末、彼のズボンのポケットから出てきたのだが、これが彼の強迫性の減弱であり、「うっかり」なのである。

自閉スペクトラム障がいとは「うっかり」できない障がいであると言っていい。いつも気持ちは外界に対する不安と緊張でコチコチで、間違っちゃいけないとルーティンを頑なに守り、失敗しちゃうと常に過度に頑張っているのである。この「うっかり」、明らかにぼっかり空いた心の緩みである。心が緩んでいなきゃ、人は「うっかり」しない。脅かされない安心の人間関係、強要されない集団の雰囲気…、それらが人を「うっかり」させる。

C男さん、頑なにルーティンを守る人である。どんなに楽しいことをしていても、必ずそれを中断して3時のおやつを食べる。洗濯の時間は必ず4時半だ。なかなかこれも譲ることができない彼のルーティンだ。

緊張で身体がガチガチの彼に動作法に取り組むことを進めたのが5年前、次第に身体が緩み、他者から身体を触られることにも抵抗が無くなり、新しい店で服が買えたり、外食では初めての店で初めてのメニューを注文ができたりと行動の変化が見え始めたころ…。

彼がいつも持って歩く手提げ袋が、動作法を実施した体育館に忘れられて残っていたのだ。職員が「珍しいことが起こったねえ」と話していたその時、彼がばつの悪そうな表情をして、「ふくろ…ふくろ…」と小さな声で呟きながら、手提げ袋を取りに戻ってきたのだった。彼は「うっかり」手提げ袋を体育館に忘れてしまったのだ。その後も彼の「うっかり」は続く。「昨日、無精髭だったよ」「部屋の鍵が無くなって大騒ぎで探したんだけど、結局彼の部屋に鍵はあったんだ」…、「うっかり」のオンパレードである。こうして彼の気持ちはどんどん緩んでいく。

「こだわり」だって変わる。これが私たちの支援力だ。